

---

# 終わらない夏

竹仲法順

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

終わらない夏

### 【Nコード】

N3897D

### 【作者名】

竹仲法順

### 【あらすじ】

ボクと小百合は夏の日、自転車に二人乗りして町を走っていた。ボクたちはそれぞれ親元を離れ、一緒のアパートに住み、同棲生活を送っていた。その日、ボクたち二人はスーパーで買い物を済ませ、町の南側に広がる海を見に行ったが……。

ボクは小百合と自転車で二人乗りして、自分たちの住む町の中を走り回っていた。真夏とあってか日差しが暑く、アスファルトに照り返している。

「喉乾いてない？」

「うん。ちよつと乾いてる」

「じゃあさ、この道をまっすぐ行つて、角を左に曲がったところに自販機があるから、そこで冷たいジュース買おう」

ボクの言葉に小百合が頷き、ボクたちは二人乗りを続けた。

やがてボクが言つた自販機の前に二人は着いた。

小百合がポケットから小さな財布を取り出し、小銭入れから五百円玉を一枚取り出した。

コイン挿入口に入れ、一本が百二十円のミニボトル入りの清涼飲料水を二本買う。

「はい、どうぞ」

「ああ。サンキュー」

ボクが礼を言い、缶の蓋を開けて、ゆっくりと呷り始める。冷たいドリンクが喉を通り越して、渴きが癒された。

ボクは丸々一缶飲み終え、缶をゴミ箱に捨てた。

ボクたちは二人とも半袖のＴシャツに、下はジーンズというラフな格好だった。

「これからスーパーに買い物に行こう」

「うん」

ボクと小百合は田舎町の小さなアパートで同棲していた。ボクが親元を離れ、小百合も同様に家を出て、二人で暮らし始めたのだ。もう丸一年になる。

ボクたちはそれぞれアルバイトをして生活費を稼ぎながら、休みの日は一緒に遊ぶという気楽な生活を送っていた。二人とも今の暮

らしをそれなりに楽しんでいる。

ボクが勢いよくペダルを漕ぎ出すと、小百合がボクの背中にぴったりと自分の体をくつつけた。

小百合が、

「警察に見つからないかな？」

とおどけたように言つと、ボクが、

「まあ、大丈夫だろ」

と言ひ、笑つてみせた。

ボクはペダルを漕ぎ続けた。自転車はゆっくりとスーパーのある方向へ向かう。

今日も夕食は小百合が自炊してくれることになっていた。小百合は夏場はいつも冷やしうどんを作ってくれるのだ。

「……」

しばらくの間、ボクたちは黙つて前を見据えていた。道路を通る車に注意しながら、町を走っていく。

やがて十分ほど走り、近所の二十四時間営業のスーパーに着いた。ボクが自転車を駐輪場に停めると、小百合が先に降りる。ボクが続いて降り、前輪と後輪にチェーンを巻く。

二人で手を繋いで、スーパーへと入つていった。

ボクたちはカートに必要な食材を次々に入れて、レジへと持っていく。

全ての商品を清算し終わり、ボクが買った品物を買ひ物袋に入れ、店外へと出た。

自転車を停めていた駐輪場まで行き、そこでチェーンを外して、自宅アパートがある方向へと向かう。

ボクがサドルに跨ると、またが小百合が後ろに張り付いた。

「買い忘れとかない？」

「うん。うどん玉はちゃんと二人分買ったし、牛乳も肉も野菜も買ったから、後は自宅の冷蔵庫に入れるだけ」

「そう」

ボクが頷き、小百合がちゃんと後ろに乗ったことを確認して、再び自転車を漕ぎ出した。

自宅に向けて、ボクはゆっくりと漕ぎ出す。前のかごには、買った商品全てが入れてある。

ボクが信号に注意しながら自転車を漕いで、安全運転で道を走る。「暑いわね」

「ああ。今日は東京だけじゃなくて、全国どこでも暑いみたいだよ。夜は熱帯夜になるんだってさ。さっき携帯の天気予報サイトで見たんだ」

「そう」

小百合が頷き、さっき買っていた清涼飲料を飲む。

ゴクリゴクリ……。

喉が揺れた。小百合は元々幾分男勝りで、豪快なところもあるのだ。

ボクも途中でいったん立ち止まって、持ってきていたミネラルウォーターのペットボトルを取り出し、キャップを捻って軽く口を付ける。

小百合がふつと自転車から海のある方向を見始めた。ボクたちの住む町のすぐ南側には広大な海が広がっているのだ。

ボクが不意に、

「海見に行こうか？」

と小百合を誘う。

「いいわね」

「よし。じゃあ、今から全力で自転車漕ぐから、しっかり掴<sup>つか</sup>まってるよ」

ボクがそう言い、海の方に向かって自転車を漕ぎ始めた。それから十分後。

ボクたちは青く澄んだ海へと出ていた。田舎町に面した海とあつてか、ビーチにはちらほらとしか人がいない。

ボクが自転車を停めて、二人で熱い砂を踏みしめながら、波際ま

で歩く。

ジーンズを捲<sup>ま</sup>くつて海中へと入り、寄せては返す波に体を濡らしながら、ボクたちはしばらくの間海水浴を楽しんだ。

時間があったという間に過ぎ、夕刻になる。

二人で並び、水平線の彼方に落ちていくオレンジ色の夕日を見つめながら、ふつと小百合が、

「キスしない？」

と言ってきた。

「ああ」

ボクが頷くと、小百合が自分の唇をボクのそれにそつと重ね合わせた。

「……」

ボクたちはしばらくの間、口付け合い、互いの口の中にある潤いや熱を移し合った。

そして夕日をバックに抱き合う。

ボクたちは抱き合った後、沈み行く太陽をじつと見つめ、それにも飽きると、ボクの方から、

「そろそろ行くか？」

と言った。

「うん」

小百合がそう返し、ボクたちは自転車を停めていた場所へと行く。付けていたチェーンを外し、ボクがサドルに跨ると、小百合も後ろに乗った。

ボクが自転車を漕ぎ、自宅を目指す。

アパートに帰り着くと、小百合が買い物袋をかごから取り、

「今から夕食作ってあげるから」

と言って、合鍵を使い、先に室内へと入っていった。

小百合は部屋に入っすぐて手を洗い、鍋にお湯を沸かして、うどん玉を茹で始めた。後から入ってきたボクは食事が出来るのをじっと待っている。

やがて小百合が茹で上がった麺を箸はしに上げ、水で冷やすと、丼どんぶりに移した。

そして並行して切り終えていた具を皿に添え、醤油を二人分用意すると、

「出来たわよ」

と言って、キッチンの隣にあるリビングに寝転がっていたボクを呼んだ。

「ああ、ありがとう」

ボクがそう返し、起き上がって、テーブルの前に胡坐あぐらを掻いた。

小百合が二人分の食事を運んでくる。

開けっ放しにしていた窓からは生温なまぬるい夜風が入ってきた。

ボクは小百合もテーブルに就いたことを確認して、置かれた食事に箸を付ける。二人で用意していたビールのレギュラー缶に口を付  
けながら、だ。

ボクたちはその夜、食事が終わると、狭い浴室で冷たい水を掛け  
合いながら、一緒に入浴した。

風呂から上がり、互いの濡れた体をタオルで拭き終えると、リビングに戻り、布団を敷く。

ボクも小百合も満腹になり、アルコールも入って入浴も済ませた  
からか、眠くなり、二人で床に就いた。

その夜。

天気予報通り、東京は熱帯夜だった。

ボクたちはカラカラと扇風機を回しながら、開けていた窓から絶  
えず風を入れ、いくらか寝苦しい夜を過ごした。

やがて時間が経ち、ボクも小百合も深夜過ぎにやっと眠りに就い  
た。朝まで一度も目覚めずに眠る。

翌朝も東京は快晴だった。

ボクは心の中でずっと思っていた。

“小百合と過ごす大切なこの夏が終わりませんように”

太陽がキラキラと照り付ける暑い季節は、ボクと小百合を包み込

み続ける。

ただ時だけが流れていく。

(了)



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3897d/>

---

終わらない夏

2010年10月8日15時11分発行